

善導の念仏実践論における九品往生

——その易行思想の背景を中心に——

王 玉 華

〔抄 録〕

善導は、『観経疏』散善義の後序において、自らの立場を「楷定古今」と位置づけている。その立場から『観経』の経義に基づいて、念仏・観仏三昧両宗を判じ、念仏独立の旗幟を鮮明にした。即ち、念仏は、弥陀本願の行であり、三心を基とすると論じ、『観経』の宗義を確立したといえる。善導は念仏を易行と判明し、

凡夫の九品往生を立論した。本稿では、念仏易行と九品往生との関係における思想背景を詳論したい。

キーワード 九品往生、易行念仏、無生無漏法、悟無生法忍、

阿鞞跋致地

一 善導の念仏思想

善導（六一三―六八一）は、『観経疏』の「玄義分」において九品往生を論じる際に「欲使今時善惡凡夫同沾九品。生信無疑。乘仏願力悉得往生」と述べているように、一切凡夫があくまでも弥陀の本願力に乗り、九品に分られ往生し得ると示している。そして「定善義」の第九弥陀真身觀の釈で、善導は『観経』の「念仏衆生攝取不捨」を「唯摂念仏者」と説明し、弥陀の本願は専念弥陀名号であり、往生浄土の行は専念弥陀名につきると示した。さらに、「散善義」の終わり

に、「望仏本願意在衆生一向専弥陀仏名」と述べ、仏の本願の意を望むならば、衆生に専ら弥陀の名号を称させることである。つまり、善導は念仏が弥陀の本願であり、凡夫往生の要義であると強調した。善導の強調する念仏に基づく論理は三つのポイントに分けて説明する。

①『往生礼讃』において、

弥陀世尊本発深重誓願。以光明名号摂化十方。但使信心求念。上尽一形下至十声一声等。以仏願力易得往生。…若能如上念念相続。畢命為期者。十即十生。百即百生。^②

と述べる。称名念仏は弥陀の本願であるから、信心を発し命が終

わるまで念仏を相続すれば、十は即ち十生、百は即ち百生。つまり定得・易得往生と強調される。

②『観経疏』『玄義分』の帰敬偈に、

我等愚痴身 曠劫来流転 今逢釈迦仏 末法之遺跡
弥陀本誓願 極楽之要門 定散等回向 速証無生身
また、「散善義」三心釈の「回向発願心」の釈に、

汝等曠劫已来…具造十惡五逆四重謗法闡提破戒破見等罪。未能除尽。…云何一生修福念

仏即入彼無漏無生之國永得証悟不退位也。^③

と述べる。念仏が易行であるという理論は、「無漏無生」法に基づく。弥陀の浄土は無漏無生の念仏法門によって建立した無漏無生の浄土である。われら世尊の末法の遺跡である弥陀の本誓願によって疾く得られる無生身は「無漏無生」を指していると思われる。つまり、十惡五逆四重謗法闡提破戒破見などの罪を犯した凡夫でも、念仏によつて無漏無生の弥陀浄土に往生し、不退位を得られる。

③ 無漏無生法と念仏との関係について、『法事讃』においては、次のように述べられる。

自然即是弥陀國。無漏無生還即真。行來行止常隨仏。証得無為法性身。

極楽無為実是精。九品俱回得不退。阿鞞跋致地即無生。^④

『往生禮讃』には、

安樂國清淨 常転無垢輪 一念及一時 利益諸群生 願共諸衆

生 往生安樂國

唯有念仏蒙光摂 当知本願最為強…到彼華開聞妙法 十地願行自然彰^⑤

『般舟讃』では、

觀經弥陀經等說 即是頓教菩薩藏 一日七日專称仏…即得不退証無生

上品上生凡夫等 持戒念仏誦經專…一念之間到仏國…當時即悟無生忍^⑥

と示す。これらの文を総合して見れば、以下のように理解できるであろう。無漏無生は弥陀浄土の真如法性界であり、菩薩初地から十地までの境地である。念仏によつて弥陀浄土に往生することはすなわち、九品往生⇨阿鞞跋致地に至ることである。上品上生は「悟無生法忍」である。「悟無生法忍」は菩薩地の初地から二地（無垢地）までと位置づける。これを頓教菩薩藏という。端的に九品往生を図式的に示せば、易行念仏⇨無生無漏法⇨悟無生法忍⇨阿鞞跋致地という菩薩地の二地無垢地である。

以上の点に着目し、称名易行と九品往生との関係を究明するために、その思想背景を詳論する。

二 本願念仏における易行思想

一、『十住毘婆沙論』における念仏易行思想

善導によつて「以仏願力易得往生」と表現される「仏願力」は、称名本願を「易行」と示す。周知のようにその先駆的思想は、龍樹の

『十住毘婆沙論』（以下『十住論』と略す）「易行品」に、「有信方便易行疾至阿惟越致者」と述べる。その主旨は弥陀の本願が称名により阿惟越致（不退地）に至ることである。つまり、易行道は弥陀の本願を中心とする称名念仏を展開するものであるといえる。「易行品」には、

若人疾欲至 不退転地者 応以恭敬心 執持称名号

と述べ、また、

阿弥陀仏本願如是。若人念我称名自帰。即入必定得阿耨多羅三藐三菩提。^⑦

と述べる。称名が不退地（阿惟越致）に至る修行方法であることについて、龍樹は特に「阿弥陀仏本願如是」と述べ、称名が弥陀の本願であると強調する。これにより、易行品の中で弥陀の本願は如何に重要な位置を占めているかが窺える。このことは易行品の前後品の関係から理解できる。

① 地相品において、

常念於諸仏 及諸仏大法 必定希有行 是故多歡喜

念諸仏者。念然燈等過去諸仏阿弥陀等現在諸仏彌勒等将来諸仏^⑧と述べる。地相品においては、「常念於諸仏」という諸仏の大法である念仏法門によつて必定地（不退地）の初地に入り、心歡喜に満ちる。ここで念仏の際に阿弥陀仏を代表に出しているということは、諸仏の中で阿弥陀仏を重要視しているからであろう。

② 釈願品には、

仏有本願。若聞我名者即入必定。如見仏聞亦如是。…若人信解

力多。諸善根成就。業障礙已尽。如是之人得聞仏名。又是諸仏本願因縁便得往生^⑨

と示すように、凡夫が不退転地を得る要因として、聞名必定と聞名往生がとりあげられる。また、称名は易行品において弥陀の本願であると示している。

③ 易行品につづく除業品の最初に、

但憶念阿弥陀等諸仏及念餘菩薩得阿惟越致。^⑩

と述べる。ここでは、阿弥陀仏を諸仏の代表に挙げていることが分かる。

以上の理由から、易行品の主題は、称名によつて阿惟越致の不退地に至ることである。称名易行を明らかにし、等しく衆生を弥陀の本願易行に導かせるためである。龍樹の本意は、唯、易行道を説いて弥陀の本願を強調したということではなからうか。

二 念仏における菩薩地

次に念仏法門は菩薩地であることについて説明する。『十住論』は（『十住経』―後に『華嚴経』の「十地品」を解釈した論である^⑪）、初歡喜地を解釈し、「阿惟越致相品」「易行品」を説明している。「易行品」の主題は、仏道を求める者が声聞の二乗地に墮する恐れがあるので、称名により、疾く菩薩の阿惟越致地に至ることがよいと強調する。これを弥陀の本願である信易行の称名と説くのである。端的に言えば、凡夫が菩薩地に入るため易行の念仏を開顯したと言える。

『十住論』はいうまでもなく『華嚴経』十地品の解釈である。「十地

品」は般若思想にもとづいている。すなわち、『華嚴經』の十地は『般若經』の「発趣品」「深奥品」において説かれる共の十地(声聞)の中、第九の菩薩地を展開させた大乘菩薩不共の十地である¹³。大乘菩薩不共の十地については、『十住論』序品において、

問曰。若人不能修行菩薩十地。不得度生死大海耶。答曰。若有人行声聞辟支仏乗者。是人得度生死大海。若人欲以無上大乘度生死大海者。是人必当具足修行十地。

問曰。行声聞辟支仏乗者。幾時得度生死大海。答曰。行声聞乗者。或以一世得度。或以二世。…行辟支仏乗者。或以七世得度。…然後乃得具足修行菩薩十地而成仏道。

と示す。この文は、生死大海を渡たる修行方法には、声聞・辟支仏・仏菩薩の三乗があるが、悟る時間の長短区別があり、三乗に分けてでも最後に菩薩十地に戻る。故に龍樹は菩薩不共の十地が、菩薩の十地と声聞辟支仏(共の十地)と峻別することの大切さを説明した。また、菩薩不共の十地は、諸仏が教えた「無上之大道」と強調するのである。龍樹が序品の初めに敬虔なる態度を以て帰敬の偈を述べたのも、不共の十地は諸仏を依止し、仏法の根本とするものであるからである。すなわち、

敬礼一切仏 無上之大道 及諸菩薩衆 堅心住十地
声聞辟支仏 無我我所者 今解十地義 随順仏所説¹⁴

と、龍樹は一切の諸仏に敬礼し、仏の所説の十地義に随順するのである。この帰敬の心を基礎とするのであるから、龍樹は仏法が延び行くため菩薩不共の十地を説明する。十地は『十住論』の主旨となった。

つまり、龍樹の『十住論』における菩薩の阿惟越致地は、菩薩不共の十地に基づく。その実践道は弥陀の本願念仏であり、凡夫にまで開かれた易行道であると分かる。

以下、念仏と阿惟越致菩薩地との結びつきの行法について説明をする。地相品において、

常念於諸仏 及諸仏大法 必定希有行 是故多歡喜

また、

若菩薩得阿耨多羅三藐三菩提記入法位得無生法忍。…一切声聞辟支仏所不能行¹⁵。

と示すように、「常念於諸仏」は諸仏の大法である念仏法門によつて必定地(不退地)の初地に入る。龍樹が菩薩十地の初地を解釈するにおいて念仏を中心行法とすることが明瞭になる。さらに、念仏によつて阿耨多羅三藐三菩提記を受け、法位に入る無生法忍を得て、声聞・辟支仏の二乗を超えるのである。無生法忍を得ることを『十住論』の入初地品には、如来家という表現をしている。

般舟三昧是父。無生法忍是母。 般舟三昧父 大悲無生母 一切諸如来 従是二法生¹⁶

と示すように、般舟三昧・無生法忍は大悲の「無生法」の実践から生ずる。無生法を父と母とに譬える。それを「如来の家」という。より具体的にいえば、念仏法門＝無生法であると言える。また、般舟三昧によつても仏を見ることについて、念仏品においては、

初地行具足究竟。自以善根福德力故能見十方現在諸仏。…為更有餘法耶。答曰、仏為是菩薩説般舟三昧經。般舟三昧名見諸仏現前

菩薩。¹⁷

と述べられる。初地に善根福德力により諸仏を見ることを得る。念仏によつて初地必定に入るから、ここにいる般舟三昧は、つまり、念仏三昧をさしている。このことから無生法忍はすなわち念仏三昧であるとして理解できる。

そして、念仏三昧の位置づけについては、略行品に

戒生上三昧 三昧生智慧 智散諸煩惱

また、護戒品に、

持戒力者。一心清淨具足十善道。戒則得修集福德力。∴ 於初地始生。至二地增長。¹⁸

と述べる。戒は上三昧を生じ、三昧は智慧を生じ、智は諸の煩惱を散ずる。戒は三学の上から図式的に示せば戒―上三昧（定）―智慧―散諸煩惱という段階で進んで行く。戒は三昧に入る基であると龍樹は強調した。初地より芽生え、二地に増長するというのは、初地の念仏は凡夫の初発心の信心と解釈し、この信心を堅固にさせ、戒を修行の基として、念仏三昧に進んでいくからである。つまり、龍樹は念仏三昧を菩薩二地に位置づけている。ここに特に主張する「上三昧」すなわち念仏三昧は、「一心清淨具足十善道」の一心―深心が菩薩戒の本質であるから、六波羅蜜の智慧と結びついた菩薩戒と説明する。これは十善道が菩薩道の基本的立場であることを明かに示している。入初地品によると、

此十住經。地地別說深心相。是故菩薩隨諸地中皆得深心深心之義即在其地。

と示す。『十住經』には、菩薩の行はそれぞれの地で深心を得ることの大切さを強調し、

深心者。大心用心愛心念心。諸菩薩以如是等心修十善道。勝一切世間。

方便者。菩薩以方便力修於善法。餘人所無。是故勝一切世間。¹⁹

と示す。菩薩戒は深心に基づき、深心は慈悲心などの等心を意味する。等心は自己のことだけではなく、相手の心を汲み取つてよく受け入れる心である。深心は十善道が菩薩戒に転入する要義であると示した。つまり念仏三昧は深心の自利利他の徳を強調し、これに対して自己の苦悩を自ら解放することだけに修行の目的がある声聞辟支仏とは、根本的に相違している。龍樹は深心が菩薩地に言う方便の必定不退の「源」とであると説明した。

さらに深心は方便力であるという説明は「護戒品」にある。

尸羅善人所敬。如報恩法。∴尸羅為最如遇急難得善知識。∴尸羅如仏自利利人。∴是正行之因。

また、

転破戒者。能令衆生捨惡行善得安樂事。令住善法者。能転衆生惡身 意業令行善身口意業。此事如初地中說。所謂見諸仏得諸三昧²⁰。という。龍樹の『大智度論』巻四十九には二地の深心を「知恩報恩心」と解釈し、これを菩薩戒清淨と強調する。ここに、戒（尸羅）は報恩法・善知識と遇うと表現する。その意味からすると戒に基づく深心は恩心であり、恩心は人々が生れつき持つ本性といえる。凡夫でも初地菩薩地に入れるについては、ただ自心（深心）を起すこと、つま

り、念仏をすることである。念仏により凡夫は自覚して悪業を離れる。これを止悪といい、さらに深心を起こし善事を行う、これを行善という。すなわち、自利利他の行を行ずることになる。これが正行(菩薩行)の因であり、諸三昧(念仏三昧)を得て、諸仏を見ることである。諸仏を見ることは、浄土に往生する証である。つまり、深心は破戒等悪業を離れ本性に転ずることになる。深心は人々の本性であるから、凡夫でも浄土に往生し不退転に至ることを立論した。これを「信を方便とする易行」の易行道と名づけるのは明瞭であろう。

以上をまとめてみると、龍樹の『易行品』は、弥陀の本願念仏によって菩薩の阿惟越致地に至ることを主旨とし、その実践法は念仏であり、無生法である。無生法は菩薩戒が深心に基づくので、凡夫に対して難行の戒を易行に転ずるのである。念仏と菩薩戒の深い結びつきは方便の易行道の要義である。これで理解できるように、凡夫は菩薩二地に入り無生法忍(念仏三昧を得て、二乗道を越えるのである)。「十住論」「易行品」は、『般若経』及び『華嚴経』の十地品を基とし、凡夫にまで開かれた信方便の易行道として説明するものであることが明らかになった。

つまり、易行道は菩薩二地に位置づけられる。善導は「散善義」三心の深心釈の「就人立信」には「十善十行随順六度之義」菩薩行の十善を諸仏の正法(戒)と述べ、「就行立信」には「一心専念弥陀名号」は弥陀の本願に相應するが故に「正定之業」と述べる。『往生禮讃』には、「安樂国清淨 常転無垢輪(二地)」と述べ、「観念法門」において「持戒念仏誦弥陀経」を上品上生と位置づけ、『般舟讃』にはこ

れを悟無生法忍と表現しているのである。²¹⁾

二、曇鸞の『往生論註』の易行念仏における九品往生説

一、九品往生と無生法忍

龍樹における信方便の易行の開頭は、浄土思想を難行道(二乗)に対する易行道(菩薩)として位置づけたものである。後に中国の曇鸞は龍樹の説に着目して、難易二道の対比をより明確にした。²²⁾ 曇鸞は龍樹の思想の単なる継承ではなく、いわゆる無生法(人法二空)²³⁾の実践を通して、阿惟越致(阿鞞跋致)に至ることを目指していたと思われる。²⁴⁾

曇鸞の『往生論註』下では「上言知生無生。当知是上品生者。若下下品人乘十念往生」と言い、終りに「彼土は無生界」と述べる。²⁵⁾ この曇鸞の解釈は、弥陀浄土への往生が無生法に基づく称名念仏であり、『観経』の九品往生の行法が無生法であると会通する。その理由は、無生法が『十住論』において、称名により阿惟越致地を得ることは、すなわち弥陀の本願であると記されている。つまり、念仏は凡夫が浄土へ往生する易行道の行法である。

これにより無生法は浄土教における弥陀の本願である念仏往生説の軸となった。曇鸞は如何にして無生法を展開したのか。『論註』冒頭、易行道を説く文に、

仏力住持即入大乘正定聚。正定聚即是阿毘跋致。

と述べる。これは浄土往生者が弥陀の仏力住持によって大乘正定聚に入り、阿毘跋致地に至るという見解である。『論註』全体を通じてこ

の主張がなされている。正定聚すなわち阿毘跋致については、『大智度論』（以下『大論』を略す）を考察してゆく巻七十七において、

第一義中諸戲論語言即是無生。得是無生忍便受無上道記。…得無生法忍已用力甚易譬如乘船。

また、巻二十七において、

無生忍法即是阿毘跋致地。復次入菩薩位是阿毘跋致地。過声聞辟支仏地亦名阿毘跋致地。²⁶⁾

と示されているように、大乘では「得無生忍法」「入菩薩位」「過二乗」等の語により、阿毘跋致地の概念が規定される。大乘菩薩道を考究する視点に立つと無生忍法は、龍樹の『大論』・『十住論』に述べられているように、無生法によって阿毘跋致地に至り、無生忍法を得ることが成立するのである。²⁷⁾『十住論』に示される易行道に無生法が深く関わっていることは、『大論』巻七十七の記述との対比によって明らかになる。両論ともに「陸道歩行」難行、水道乗船「易行」を説いているが、『大論』は無生法忍を得る故に易行であり、また無生法忍「念仏三昧である」と、更なる説明がある。²⁸⁾

無生忍法について、曇鸞は『論註』において、

序法蔵菩薩於世自在王仏所悟無生法忍。爾時位名聖種性。於是性中発四十八大願修起此土。

また、

安楽浄土は無生法忍菩薩浄業所起。²⁹⁾

と記す。曇鸞は阿弥陀仏が因地の法蔵菩薩であつた時、無生法忍を悟つて、四十八願をたてて浄土を建立されたと記している。龍樹もそう

であることを、『大論』に次のように示す。

衆生有三分。一者正定必入涅槃。二者邪定必入惡道。三者不定。於正定衆生中当最大故名摩訶薩。…所謂性地人是聖人性中生。故名性。…初発意者。得無生法忍。随阿耨多羅三藐三菩提相发心。是名初发意名真发心。了了知諸法実相。…有授記入法位得無生法忍者。名阿鞞跋致。如是等大衆当作上首故名摩訶薩。

また、

菩薩初深心牢固。是名諸仏姓。有人言。得無生法忍是諸仏姓。是時得仏一切種智氣分故。³⁰⁾

また、

初发意時行六波羅蜜上菩薩位得阿毘跋致地。…发心即与般若波羅蜜相应：如阿弥陀仏先世時作法蔵比丘。³¹⁾

と述べる。龍樹の『大論』によると、凡夫が入初地に入る手だては、性地深心「仏種性」によって正定に入り、無生法忍を得ることである。これを「授記入法位」といい、阿鞞跋致という。『十住論』によると初地は必定に入る。初地の念仏によって二地の念仏三昧に至る無生法忍を得て、阿鞞跋致菩薩地に至るのである。無生法忍を中心とした大乘菩薩道は、念仏三昧「無生法忍」を成立させた。つまり、弥陀の因地の法蔵菩薩の行法は『大論』・『十住論』共に「得無生法忍已用力甚易譬如乗船」と述べ、易行道的主旨が無生法忍を得ることであると示す。さらに、曇鸞は無生法忍を「悟無生法忍」と明示した。

この見解については『無量寿経』において、次の記述がある。

① 超越声聞縁覚之地。…深入菩薩法蔵。得華嚴三昧。…住深定

門。悉觀現在諸仏。

② 第十一願…不住定聚。必至滅度者。不取正覺。第十八願念仏往生願。

③ 第三十四願…聞我名字。不得菩薩無生法忍諸深總持者。不取正覺。

④ 三輩往生の文の前序に「有衆生生彼国者。皆悉住於正定之聚」。

⑤ 方便之力…究竟菩薩諸波羅蜜。…遠離声聞緣覺之地。³²
『觀無量寿經』（以下を『觀經』と略す）においては、

① 世尊は阿難及び韋提希に清淨業を説き、「以仏力故…応時即得無生法忍」である。

② 第九觀弥陀の真身觀に「以見諸仏故、名念仏三昧。…生諸仏前得無生忍」である。

③ 九品往生の上品上生・上品中生は無生法忍が得られる。

④ 得益分に「韋提希、与五百侍女…得見仏身…得無生忍」と示す。³³

『阿弥陀經』においては、「衆生生者皆是阿毘跋致地」等の文を証とし、これを合わせ考察すると、弥陀の本願である称名念仏によって無生法忍を得て、阿毘跋致菩薩地に至る。つまり、無生法忍（無生法）Ⅱ正定、正定Ⅱ阿毘跋致菩薩地である。九品往生の中の上品上生・上品中生は、無生法忍が得られると結論する。このことは、おそらく『觀經』の第九觀弥陀の真身觀にある「無生法忍Ⅱ念仏三昧」を解明する根本になるであろう。

二、無生法忍について

龍樹の『十住論』において、無生法は凡夫が初地歡喜地に入る易行道であると記している。凡夫が無生法忍を如何に得るかについては、曇鸞は無生法を「言知生無生。当是上品生者。」と示し、上品生の者は無生法を得るのである。上品生については、「未証淨心菩薩者初地已上七地已還諸菩薩也」といい、また「平等法身」を説明して「平等法身者八地已上法性生身菩薩也」と述べる。「平等法身」というのは、淨土に往生した未証淨心の初地以上七地以前の菩薩は、八地菩薩と同じく法身を因心とするという意味である。これは淨土には七地沈空の難がないからであって、沈空の難を越えた世界が阿弥陀仏の淨土であることを示している。³⁴ 曇鸞は初地に法身（『十住論』の深心）を得れば、必定不退の因として、疾くに八地に至る。この因心により「七地沈空の難」を越え、二乘地に墮することはないと説いている。³⁵

曇鸞は、無生法を得る方法を『論註』で具体的に示し、「龍樹菩薩婆藪槃頭菩薩輩願生彼者当為此耳。」と述べる。その冒頭で、称名念仏（仏力住持）によってすみやかに正定聚の阿毘跋致菩薩地に入ると説明する。これは龍樹・天親共に開示する大乘菩薩道である。このことは曇鸞が『無量寿經』に依拠し、結論づけたと思われる。すなわち曇鸞は弥陀の第二十二必至補処の願文である「超出常倫諸地之行現前修習普賢之德」に依拠したのである。この願文に続き、

案此經推彼国菩薩。或可不從一地至一地。言十地階次者。是釈迦如来於閻浮提一応化道耳。他方淨土何必如此。

とこの願文の説明をした。すなわち、初地未証淨心の菩薩が平等の法

を得れば、すみやかに八地法性生身菩薩地に至るのは、弥陀の第二十二必至補処の願によるからであると述べる。菩薩の行は常倫諸地の行を超出することであるから、「一地より一地に至らざるべし」と指摘する。これに対して一地より一地へと菩薩の階位を漸次上昇するという説は、世尊が娑婆の世界の人たちに対して示す方便の説であると明言している。そうした観点から、弥陀の本願力によって、常倫諸地の行を経過せずして、超越することは「頓」の意味があると示す。『論註』に示されている八地不退に、易行品の初地不退を引き出すのは、易行道の頓教的性格を説明するためである。この説明は、修道の段階を一段一段登りたかめゆく二乗難行道との相異を強調するためである。曇鸞は龍樹から伝承した「信・易行・疾」の浄土教と、天親の「速得成就」の五念門行が、弥陀の本願の称名念仏に基づくことにより、無生法は修行方法を漸・頓・声聞・菩薩の二門に分けることを明瞭にした。³⁷曇鸞はこのことについて、つづいて、次のように説明している。

八地已上菩薩常在三昧。以三昧力身不動本処而能遍至十方供養諸仏教化衆生。無垢輪者仏地功德。仏地功德無習氣煩惱垢。仏為諸菩薩常転此法輪。

また、

此喻凡夫在煩惱泥中為菩薩開導能生仏正覺華。³⁸

と述べる。この文は、二地無垢地は仏地の功德をあらわし、八地法身菩薩は常に正定三昧に居り、その正定三昧は二地の無垢地を基とするとして述べているのであろう。これは凡夫が菩薩道に入るために諸仏が開示した菩薩道である。つまり、菩薩二地は『十住論』易行道の主旨で

ある初地の深心の信から、二地戒の行へ至ると示す。天親の『往生論』に「安樂国清浄、常転無垢輪」と述べられていることと同じである。

また、二地無垢地の釈にある「仏地功德無習氣煩惱垢」が法性に結びつくことについては、法蔵菩薩の発願・修行の過程をへた願心成就の弥陀浄土を説明する部分で言及している。

性は本義。言此浄土随順法性不乖法本。是同華嚴經宝王如来性起義。又言積習成性。法蔵菩薩。集諸波羅蜜積習所成。亦言性者是聖種性。序法蔵菩薩於世自在王仏所悟無生法忍。爾時位名聖種性。於是性中發四十八大願修起此土。即曰安樂浄土。是彼因所得。果中説因故名為性。又言性是必然不改義。如海性一味衆流入者必為一味海味不随改也。³⁹

弥陀の浄土は法性に随順して法本（真実不変の本性）に乖かざる事、『華嚴經宝王如来性生起の義に同じ』であると指摘している。⁴⁰すなわち、『華嚴經』卷第二十三以下に説く歡喜地から法雲地に至る不共の十地に相当する。二地無垢地の因心は法蔵菩薩が世自在王仏の所で、無生法忍を悟られた因心（初発心）であり、その時の位が聖種性であった。法蔵菩薩が、その因心により四十八願をたてて、六波羅蜜の修行を積みかさねることによって成就したことを「積習成性」という。

これにより、八地法性生身菩薩地である無生法忍を得るのである。故に、法性を基とし成就した弥陀の浄土を安樂という。

曇鸞は弥陀仏が法蔵菩薩という因位にある時、六波羅蜜の実践は法性を基とし、その法性を「積習して性を成就するところ」と示す。こ

こにいう性を成就するということは、二地で「仏地の功德は習気煩惱垢なく」という意味である。その表現は

語断則習気無餘。…夫菩薩帰仏如孝子之帰父母忠臣之帰君后。動静非已出沒必由。知恩報德理宜啓。⁴¹

という文で表わされている。菩薩は仏に帰依・孝子は父母に帰依・忠臣は君后に帰依する如くと述べるのは、知恩心は自身の天性にある自然（語断）の徳であると解する。この徳は法蔵菩薩の因心であり、人々にもそなわった本性である「恩心」と解明する。その根拠が龍樹にあることは前述した『大論』において、二地無垢地の深心を「知恩報恩」と解釈し、これを菩薩清淨戒という。また、

譬如大臣特蒙王恩寵常念其主。菩薩亦如是…知恩故常念仏

また

菩薩常敬重於仏。如人敬重父母。…知恩故広供養

とあつて、曇鸞は「孝子之帰父母忠臣之帰君后」と忠孝君父の喩を出し、念仏が知恩の義と表現する。また、『大論』巻七〇において、

諸仏依止法以法為師。法者即是般若波羅蜜。…知恩者。諸世間善法中最上。是故仏自説知恩報恩中第一。⁴²

と述べる。知恩については、『無量寿経』を根拠としていることが明らかなのは、『無量寿経』五悪段の後の部分に、現世修行を世尊の勸説として強調している部分がある。

汝等於是広植徳本。布恩施慧勿犯道禁。忍辱精進一心智慧。転相教化。為徳立善。⁴³

である。これらの文によると、恩心は般若波羅蜜の基であり、諸仏所

依の正法である。つまり、恩心は功德善根である。知恩は必ず歡喜を伴い、その歡喜には信が離れない。知恩は信力によつて法性の功德が行者の身に満ちる体得から、このことを『十住論』初地歡喜地にも「常念仏」と示すことにより、二地は念仏三昧であることが理解できる。法性は人々が本来もっている心性であるから、念仏を易行道というのである。「阿弥陀仏本願如是。若人念我称名自帰。即入必定」に適った説明と言えるであろう。善導の玄義分には、法性は「凡聖齊円」により、弥陀の淨土が報土と判明し、凡夫が報土に入れる「凡夫入報」と立論することとなる。

このことは、『無量寿経』卷上法蔵菩薩の因行段において

無染恚痴。三昧常寂智慧無礙。…修習善語自利人彼我兼利。…自行六波羅蜜。教人令行。無央数劫積功累徳。…常以四事供養恭敬一切諸仏。

また、

其仏本願力 聞名欲往生 皆悉到彼国 自致不退転…
清淨有戒者 乃獲聞正法…二乗非所測 唯仏独明了⁴⁴

と説かれている。弥陀の因地行は、六波羅蜜に基づく自利利他行である。この行は清淨戒により身・口・意の三業清淨から、三昧（念仏三昧）の境地に至るのである。この三昧の境地である「修習善語」については、『十住論』で「於四摂中愛語偏利」とあり、これはすなわち初地菩薩の行のことである。また、「六波羅蜜中戒度偏利」とあり、これはすなわち二地菩薩の行である。二地菩薩の行は、『無量寿経』に示す念仏（聞名）＝戒は諸仏が説かれた正法であるので、二乗を越

えて不退転地に至るということを解明した。法蔵の発願修行により弥陀正覺の果徳に成就した本願思想が菩薩二地に存することは、龍樹により解明された信易行の阿鞞跋致地に当るのではなからうか。

以上により、「二地無垢地」＝「悟無生法忍」は、弥陀の因地であるとの結論づけられる。弥陀の因地の行が九品往生に関係することについて、『観經』には以下の如く説明されている。上品上生は「無生法忍」を悟り、諸仏の前で「授記」を得て本国に還る。中生になると、これに一小劫時間がかかり、下生は三小劫を経て、ようやく「百法明門」を得、初地（歡喜地）に達すると説かれる。龍樹の『大論』には、淨土往生者を乘羊・乘馬・乘神通の三種に分けている。乘神通者は「初発意時行六波羅蜜。上菩薩位得阿毘跋致地」と解説し、弥陀の因地行「発心即与般若波羅蜜相应得六神通」と示し、「遇仏聞大乘法」と位置づける。⁴⁶ このことを曇鸞は上品生のみと記す。善導の『往生禮讚』においては、世親の五念門釈の回向門に六神通を得ると示され、これを「乘仏本願。上品往生阿弥陀仏国。到彼国已。得六神通」と説明する。この六神通を得ることは、「安樂国・常転無垢輪」という二地の無垢地と説明されている。このことを『般舟讚』では、「超証常倫諸地上」・「触者即悟無生忍」と強調している。⁴⁷ つまり、善導は經説及び龍樹・曇鸞を継いで、「悟無生法忍」を九品往生の実踐行の主旨とし、弥陀の因地を二地の悟無生忍と確定した。さらに、「悟無生法忍」を明らかに示したのは、「散善義」に「上輩三位者即名菩薩戒。正由人位定故自然転成」と述べ、『般舟讚』に「上品上生凡夫等、持戒念仏誦經專、当時即悟無生法忍」と述べ、上中生は七日を経て明門

歡喜地に入り、上下生には十劫を経てもこれはかなわず、明門歡喜地に達するということによる。⁴⁸

弥陀の因地行について、藤堂恭俊氏は、「古くからこれを問題としてとりあげ、その解答にも初地の無生法忍、あるいは八地の無生法忍の時の発願とする両説が行われている。」と述べる。⁴⁹ この二つの説方を矛盾なく理解するには、無生法忍ということが、初地の信から二地の戒行により無生法忍を悟り、その真の完成は第八地においてであると、考えたらいいのではないだろうか。

三、易行道と難行道Ⅱ念仏と觀仏の区別

一、『大智度論』における易行道と念仏三昧

無生法を漸・頓・声聞・菩薩の二門に分けるということについては、『十住論』に示すように、『華嚴經』の十地は般若思想に基づくので、この点に着目し、龍樹の『大論』との共通の思想を導き出し、その「発趣品」の文を挙げることにによりと理解できるであろう。

地有二種。一者但菩薩地。二者共地。共地者。所謂乾慧地乃至仏地。但菩薩地者。歡喜地離垢地有光地增曜地難勝地現在地深入地不動地善根地法雲地。此地相如十地經中広説。入初地菩薩應行十法深心乃至実語。⁵⁰

と述べている。地には二種有るとし、歡喜地等の但菩薩地と、乾慧地等の共地を挙げている。但菩薩地は、菩薩の修行階位十地のみを取り組んだものであり、これは『十地經』（『華嚴經』の十地品）に記されている。⁵¹ 共地とは乾慧地・種性地・八人地・見地・薄地・離欲地・已

弁地（声聞の七地といわれる）・辟支仏地・菩薩地・仏地であり、声聞や辟支仏の階位をうちに含んだ十地を取り組んだものである。ここでは、二種の十地が説かれているのであるが、「入初地菩薩修行十法深心乃至実語」と説き、但菩薩地は初発心から初地に入る深心を得ることにより、共地と区別する点を強調した。これにより、共地は第九菩薩地の別開であるとは、第九菩薩地こそ、声聞の自利（空観）をも転向させて利他の大道に再生することである。このことは『十住論』の序品にも明確に示される。『大論』において無生法を華嚴の十地と、共の十地をならべて説明するのは、頓・漸を明らかにわけて表現するためであろう。この二つの十地説の具体的区別を、以下に問題としてとりあげる。『大論』巻七十五において

所謂菩薩從初發心來行般若波羅蜜。具足初地乃至十地。是十地皆佐助成無上道。十地者乾慧地等。乾慧地有二種。一者声聞二者菩薩。声聞人獨為涅槃故勤精進持戒心清淨堪任受道。或習觀仏三昧或不淨觀。：雖有智慧不得禪定水。則不能得道故名乾慧地。於菩薩則初發心乃至未得順忍。⁵³

と述べる。仏道の修行は、禪定すなわち三昧に入るから、忍を得て三昧の境地に至るべきである。三昧について、菩薩道の但菩薩地は、初発心から六波羅蜜の自利利他の念仏三昧を実践の基とし、これに対して、声聞道の共地は、涅槃をめざす自利行が觀仏三昧・不淨觀を実践の基とする。これらは共に、初発心の乾慧地という。続いて、

性地者声聞人從煖法。乃至世間第一法。於菩薩得順忍。愛著諸法実相亦不生邪見得禪定水。八人地者。從苦法忍乃至道比智忍是十

五心。於菩薩即是無生法忍入菩薩位。見地者初得聖果。所謂須陀洹果。於菩薩即是阿鞞跋致地。

と示すように、忍によつて三昧を得るのである。忍は性地から八人地者にかけて二種ある。声聞地においては煖法から苦法忍を得ることを觀仏三昧という。菩薩地においては順忍（柔順忍）から無生法忍を得ることを念仏三昧という。このように忍を得ることによつて、声聞の觀仏三昧と菩薩の念仏三昧に分かれる。それを見道地でいえば、声聞の見道初果須陀洹果に相当し、菩薩地の初地阿鞞跋致地に相当する。その結果は見道地において声聞の有漏、菩薩の無漏であると、『大論』巻二十三に指摘している。⁵⁴

龍樹の指摘である有漏・無漏の区別は、修行の第一歩である忍が法性に基づくから、法性の性と相に二種がある。したがって、法性の本質を究明することは重要な論点になる。これにより、『大論』発趣品に無生法忍を規定し、「無生法忍者。於無生滅諸法実相中。信受通達無不退。是名無生忍」と述べ、勸学品に「依止生滅智慧故得離顛倒。離生滅智慧故不生不滅。是名無生法。能信能持故名為忍」と述べる。⁵⁵ 無生法は法性に基づく不生不滅の諸法実相で信受を持ち、不退なきことを無生忍と規定する。二乗の苦法忍が法相の生滅に拘わることに対して、法性の不生不滅の忍を菩薩の無生法忍と強調した。これについて、歎淨品に、

無常苦空無我不生不滅非不生不滅等。種種因緣讚歎。滅諸觀戲論断語言道。是故説般若波羅蜜清淨。於諸法無所受。滅諸觀戲論断語言道。即是入法性相。⁵⁶

とある。龍樹は法性の不生不滅と法相の生滅の二性を、生滅空觀と不生不滅般若波羅蜜に分判したのである。苦法忍の修行を二乗の生滅空觀と呼び、無生法忍の修行を菩薩の般若波羅蜜清淨と称した。これに有漏・無漏と觀仏三昧・念仏三昧との区別である。龍樹は菩薩道の基本的な立場である二乗を超えることが、無生法忍であると明らかにしている。

これにより、無生法忍の実践が念仏と密接なつながりを持っていることは、『大論』卷八十七に、つぎのように述べられる。

念仏等六念。是初次第行。以易行易得故。∴有法共行故名為易。

∴初品中広説。六波羅蜜六念等。柔軟易行不生邪見。⁵⁷⁾

要するに六波羅蜜は不生不滅の法性に基づき、法性は菩薩地に言えばすなわち深心である。念仏は深心に基づく故に「有法共行」という。つまり、念仏∥六念であり、念仏の行六波羅蜜は深心に基づいているから菩薩行といい、実際に行われる修行の方法と関連され、難易を分けることになる。したがって、難易の二行は、行体（法性）・行（念仏）についての分判であると言える。つまり、念仏は菩薩行の本質であり、深心に基づく六波羅蜜を行ずることである。

六波羅蜜について、仏道の実践に戒（戸羅波羅蜜・定（禪波羅蜜）・慧（般若波羅蜜）の三学が含まれている。戒は三学の基であるから、易行道に轉換する主要な柱である。このことは卷十四において、戒略説即有八万。広説則無量。我当如何能具持此無量戒法。唯当忍辱衆戒自得。

と示す。戒といえは、略説八万があり、詳しい説明は無量である。し

かし、戒について、龍樹はただ忍辱のみ、衆戒は自得であると強調した。このことに基づく易行の要義は、卷八十七において

是菩薩復聞大乘深義。住衆生等中。無別異心可得仏。∴以此大因縁具足忍波羅蜜故得作仏。由何而得。由忍恕故。是以菩薩視怨如親。

また、卷七十二において

瞋是一切重罪之根。若菩薩於衆生起下心。衆生若罵若打則無恚恨。∴惡中之惡不識恩分。菩薩等心於此通達無礙。∴慈心安穩無礙不惱心。譬如孝子愛敬父母∴世人但能愛敬所親。菩薩普及一切。得是柔軟清淨好心名衆生忍。是法忍初門。次行十善道。⁵⁸⁾

と示すように、戒は忍に基づき、忍は戒の実践し守るべき修行である。遡って大乘戒の源流をたどてみると、『般若經』の戒波羅蜜と、『十地經』の説く二地無垢地に戒について明示されている。⁵⁹⁾二地無垢地は十善戒また十善道であるから、『般若經』も『十地經』も、十善道をもつて大乘戒の特色としている。『十住論』において菩薩戒は、身・口・意の三業に意業の主をおき、その意業は菩薩地の基である深心を指している。これにより、『大論』でも、とくに意業の貪瞋痴の三悪の中の瞋心は、一切重罪の源と示す。その瞋心を轉換するは等心であり、等心∥深心∥慈心（四無量心）である。凡夫は深心を体得すれば、『怨親平等』になり、初地の菩薩に入ると卷四十九に示している。⁶⁰⁾深心について龍樹は、『十住論』・『大論』共に深心を初地に自信心の信、二地に戒に基づく恩心と解釈した。恩心は親子の心である自然の戒と言える。戒の実践である念仏は、忍∥戒を通して易行の要義を表現し

た行である。すなわち、忍は忍波羅蜜と名づけられ、無生法忍である
と考える。

ここに注目すべきことは、二地無垢地が念仏三昧の境地に至ると龍
樹が、解明したことである。念仏の実践は戒・定・慧の三学また、至
誠心・深心・随喜回向心の三心が自然にそなわる。このことは次のよ
うに示される。

如何得随喜：是菩薩欲起随喜福德。仏は福德主。是故念仏。…従
初発心者。初発心作願。我当度一切衆生。是心相应三善根。不貪
不瞋不痴善根。相应諸善法及善根所起身心口業和合是法名為福德。
従初発心行六波羅蜜入菩薩位得十地。…因諸仏大乘人。行六波羅
蜜相应福德。

また、

復次随喜福德。即是実福德。所以者何。念過去仏即是念仏三昧。
亦是六念中。念仏念法念僧念戒念捨念天等。因行清淨戒入禪定起
畢竟智慧和合故。能起正随喜。…是心回向者。即是随喜心。⁽⁴⁾

と述べる。「如何得随喜」とは、すなわち如何に深心を得て菩薩初地
に入るか、ということである。つまり、人間によつて行われる身・
口・意の三業は、意を主におく。自発的に誓い「不貪不瞋不痴」の
「廃悪修善」を自律的に志向させる。諸善の根本は、「怨親平等」すな
わち、彼我の差別対立を完全に超克して彼我一体と成るという同朋観
に立つ慈しみ哀れむ心である。それは深心すなわち随喜回向と表わさ
れる。また「愛敬平実至誠口不妄語」も戒に基づくから至誠心をそな
える。⁽⁵⁾ つまり、日常生活の中に自からとり入れられた深心・至誠心・

随喜心三心を清淨戒という。清淨戒は禪定に入る要因であるから、智
慧に合致するので、戒・定・慧三学をそなえる念仏三昧という。巻四
十九に清淨戒は二地に位置づけると示される。簡潔にいえば、六波羅
蜜は菩薩十地の基であり、二地で三心、三学がそなわる念仏三昧を得
るのである。これは「諸仏菩薩共通」の易行道であり、龍樹は凡夫の
ために、諸仏菩薩所行の福德・智慧による道を開示したと言えよう。
これを、

初发意行六波羅蜜。上菩薩位得阿鞞跋致地。…発心即与般若波羅
蜜相应：如阿弥陀仏先世作法藏比丘。

また、

菩薩初发意行六波羅蜜時。以智見觀入八地直過。⁽⁶⁾

と示す。但菩薩地は六波羅蜜を修行の基とし、三心・三学がそなわる
から、無生無漏の無生法忍を得て念仏三昧の境地に至る。これを阿鞞
跋致地と名づける。阿鞞跋致地が共地の二乗地を越えて、ただちに九
地の菩薩地に入るという表現は、易行道の頓教的特色を明々白々に示
し、念仏三昧と觀仏三昧の相異を強調するにあつた。龍樹は、仏道修
行の方法に行体・行により難易の二行を分判し、頓・易の阿鞞跋致地
を弥陀の因地行また本願であると明瞭にしている。すなわち、但菩薩
地は六波羅蜜の実践の基であるから、初地に淨土易行の法を開説し、
二地菩薩戒が三心に基づく念仏三昧の境地に至ると、教理的根柢を明
らかにしたのであろう。

二、善導における易行道の受容

曇鸞は、難易二行説を踏まえて、龍樹の称名易行を継承した。念仏に基づく無漏無生の法性は、曇鸞及び道綽が「上言知生無生当是上品生者。若下下品生人乘十念往生」と示し、善導はさらに、九品皆凡を主張して念仏往生を勧めた。『法事讃』には次のようにある。

自然即是弥陀国。無漏無為還即真。行來行止常隨仏。証得無為法性身。極樂無為實是精。九品俱回得不退。阿鞞跋致即無生。

また、

極樂無為涅槃界。隨緣雜善惡難生。致使如來選法要。教念弥陀專復專……坐時即得無生忍⁶⁵

弥陀の浄土は無漏無生の法性に基づき、凡夫が上中下九品の段階にわけられていても、念仏により等しく浄土に往生し、無生忍を得て「無生・不退」の阿鞞跋致地に至ると示す。善導も、凡夫を往生させるために、世尊は念仏法門を選んだと強調した。

『般舟讃』においても、次のように記す。

觀經弥陀經等說 即是頓教菩薩藏 一日七日專称仏
命斷須臾生安樂 一入弥陀涅槃國 即得不退証無生
また、

門門不同名漸教 万劫苦行証無生⁶⁶

善導は『大論』の頓・漸、難・易説を継承しつつ、無生法の行体（法性）を二乗の有漏法相と菩薩の無漏法性に区別した。行を漸教の二乘法である觀仏三昧と、頓教の菩薩藏である念仏三昧とに分別した。頓漸の二門に難易の分判、すなわち觀仏三昧・念仏三昧との分判は、善導の「散善義」三心釈の中の回向発願心にも示されている。

汝等衆生曠劫已來……具造十惡五逆四重謗法闍提破戒破見等罪。未能除尽。然此等罪繫属三界惡道。云何一生修福念仏即入彼無漏無生之國永得証悟不退位。

無漏無生の念仏法門は、十惡五逆四重謗法闍提破戒破見等の罪を犯す凡夫でも、念仏によつて無漏無生の弥陀浄土に往生し、阿鞞跋致地の不退位に至ると示すものである。このことについて、『往生礼讃』には、念仏が「十即十生・百即百生」すなわち、定得・易得往生と善導は肯定した。無漏無生の菩薩藏頓教念仏法門こそ、善導の「九品皆凡説」の要義であると言えよう。

三、善導の九品往生説における觀仏と念仏との区別

善導の五部九巻を通じて、理論（教義）と実践（行儀）は、相互的な関連を持つものとして主張されている。⁶⁷ すなわち本願念仏は、善導の五部九巻を一貫する理論である。これにより、善導の本意は、『觀經疏』の第九觀弥陀真身觀の釈の如く、「專念弥陀名号」を強調している点にあるのではなからうか。『觀念法門』では、觀仏三昧と念仏三昧の二種の三昧を説くが、觀仏三昧に関しては、

住心向眉間白毫。極須捉心令正。更不得雜亂。即失定心。三昧難成。応知。是名觀仏三昧觀法。

と述べ、乱心を摂持するために、一境（眉間白毫）に心を住させることを、觀仏三昧と名づく。また、念仏三昧について、
一切時中常迴生浄土。但依觀經十三觀安心。必得不疑。又白行者。欲生浄土。唯須持戒念仏誦弥陀經。……皆是上品上生人⁶⁸

と述べる。「一切の時中に常に回向すれば浄土に生ず。但し観經の十三觀によつて安心して必ず疑わざることを得よ。」の意味は、浄土に往生することを欲すれば、「持戒念仏誦弥陀經」となることであると、善導は強調した。また、善導が十三觀の中の第九觀弥陀の真身觀に示す眉間白毫觀は、『般舟讚』において「触者即悟無生忍」と示すように、「悟無生法忍」は、「持戒念仏誦弥陀經」を指していると考えられる。これにより、弥陀の因地は但菩薩二地にあると分る。故にその文は、觀仏・念仏両三昧に嚴然たる廃立を明示するために説かれたものであるう。『往生禮讚』等において、さらにこの意味が明瞭となる。

問曰。何故不令作觀。直遣專称名字者。

答曰。乃由衆生障重。…觀難成就。直勸專称名字。正由称名易故⁶⁹

…

と述べる。衆生は障り重いから、觀仏三昧が成就しがたい。称名は易行であるが故に、善導は「專称名号」を勧めたのである。

具体的に善導の「玄義分」序題門の中から、定と散を定義づけた箇所をあげてみると、

其要門者。即此觀經定散二門是也。定即息慮以凝心。散即廃惡以修善。回斯二行求願往生也。言弘願者。如大經說。一切善惡凡夫得生者莫不皆乘阿弥陀仏大願業力為増上縁⁷⁰。

「定」は、慮をとどめて、以て心を凝す。これを定善という。「散」は惡を廃し、以て善を修する。これを散善という。定・散二善を往生淨土の行と示している。「言弘願者。如大經說」の「弘願」とは、凡夫の往生が、弥陀の念仏弘願を顕彰する意となる。『觀經』の要旨は、

弥陀の弘願である。弘願の要義は、「散善義」九品往生の釈によると、それぞれを「辨定三心以為正因」といい、結文には、「三心既具無行不成。願行既成若不生者。無有是処」と表現し、三心が具すれば願行具足して往生すると述べている。その三心に基づく称名念仏は、九品往生の要旨であると善導は強調した。「玄義分」「二乗種不生会通」において、『大品經』を引用し、最後の部分の結語に「正由託仏願、以作強縁、致使五乘齊入」と述べるように、念仏はまさに萬機普益の法門であり、ただ念仏のみが弥陀の真実意であると強調した。善導は、『大論』に示しているように、二乗（中品生）も回小向大の菩薩道に導かれることを強調する⁷¹。

以上により、『觀念法門』の「捉心令正」を「息慮以凝心」と会通するのは「觀仏三昧」の空觀であり、「持戒念仏誦弥陀經」は三心がそなわる念仏三昧であると考えられる。善導は念・觀両三昧、すなわち難・易二行の相違点の源を明らかにした。

おわりに、

祖師によつて示された九品往生の易行性について、称名易行と無生法の關係を中心に解明に努めた。曇鸞及び道綽が「上言知生無生当是上品生者。若下下品生人乘十念往生」と示し、その上に立つてさらに善導は、九品皆凡論を主張した。龍樹の『大論』によれば、浄土往生者を乗羊・乗馬・乗神通の三種に分けられていて、乗神通者は初発意時に阿鞞跋致地に至る。これは弥陀の因地行と示し、「遇仏聞大乘法」と位置づけられている。善導は遇大と遇小と遇惡という九品往生が遇

縁の差異であるとした。『般舟讃』に示すように、臨終の際、阿弥陀仏などの来迎の様子の差異と、往生した後の極楽池中の蓮華開華の時期等は、上品・中品・下品で異なるのみである。すなわち善導の「九品皆凡」は、「五乗齊入」の観点に立っている。しかし『観念法門』・『往生礼讃』には「阿弥陀仏国に上品往生する」と、さらに勧める。^②つまり、善導は「上品往生」の「悟無生法忍」を、最終目的としていたのではないかと考えられる。称名念仏は弥陀の本願であるという易行品の原意には「悟無生法忍」の思想が、脈々と流れている。

以上、善導は『大論』に基づいて観仏三昧と念仏三昧とを区別し、念仏三昧が三心具足の念仏であることを思想の力点としたことが明確になる。三心と念仏との関連については、引き継ぎ今後の課題として研究していきたい。

〔注〕

- (1) 大正蔵三七、二四九中。
- (2) 大正蔵四七、四三九中。
- (3) 大正蔵三七、二四六上、二七二中。
- (4) 大正蔵四七、四三二下、四三三中。また、深貝慈孝『善導教学の成立とその展開』三〇一頁。思文閣、二〇〇二年。
- (5) 大正蔵四七、四四三下、四四六中。
- (6) 大正蔵四七、四四三下、四四六中、四四八下、四五四中。
- (7) 大正蔵二六、四一中、四三上。
- (8) 大正蔵二六、二六中。
- (9) 大正蔵二六、三二下―三三上。また、武内紹晃「龍樹」(『浄土仏教の思想』三、八七頁)。
- (10) 大正蔵二六、四五上。

- (11) 加藤智学「仏教支那伝通の初期に於ける浄土教」(『宗学研究』十八号、一二頁、昭和十四年)。また、山口益「龍樹・世親における浄土思想」(『仏教の根本真理』六〇七頁、三省堂、昭和三十一年)。また、武内紹晃「龍樹」(『浄土仏教の思想』三、五八頁、講談社、一九九六年)。また、藤堂恭俊「浄土仏教の思想」四、七二頁。講談社、一九九七年。
- (12) 大正蔵八、二五六・三四三。
- (13) 雲村賢淳「十住毘婆沙論」における念仏思想」(『宗学研究』二〇・二一合併、一四八頁、昭和十五年)。
- (14) 大正蔵二六、二五上中。
- (15) 大正蔵二六、中下。
- (16) 大正蔵二六、二五中下。
- (17) 大正蔵二六、六八下。
- (18) 大正蔵二六、九二中、一〇九上中。また、武内紹晃「龍樹」六八頁。
- (19) 大正蔵二六、一〇二下。
- (20) 大正蔵二六、一二〇、一二二中。
- (21) 大正蔵三七、二七二上中。大正蔵四七、二三中、四四三下、四五四中。
- (22) 藤田宏達「浄土三部経の研究」五一四頁。岩波書店、二〇〇七年。
- (23) 大正蔵二五、四三七下に「以衆生空法空故：説諸法相決定無生」と述べる。衆生空法空は人・法二空という。
- (24) 藤堂恭俊「易行思想とその展開」(『印仏研』三の二号、六〇九頁、昭和三〇年)。また、『浄土仏教の思想』四、六九頁。講談社、一九九七年。
- (25) 大正蔵四十、八三九上中。
- (26) 大正蔵二五、六〇二上、二六三下。
- (27) 『大論』の引用については、藤堂恭俊「浄土仏教の思想」四、七五頁。また武田浩学「信方便易行における自覚と果証」(『印仏研』四六の一、二四頁、平成九年)。
- (28) 大正蔵二五、六七二中。

- (29) 大正蔵四十、八二八下、八二九上。
 (30) 大正蔵二五、三八三上中、四一九上。
 (31) 大正蔵二五、三四二。
 (32) 大正蔵十二、二六六中、二六八、二七二中、二七四中。
 (33) 大正蔵十二、三四一下、三四三下、三四五上、三四六中。
 (34) 舟橋一哉『仏教としての浄土教』一一九頁。法蔵館、昭和四十八年
 (35) 大正蔵四十、八四〇中。
 (36) 同右。
 (37) 斎藤晃道「曇鸞の不退の捉え方について」(『印仏研』二六の五二、
 六八九頁、一九八七年)。また、藤堂恭俊『浄土仏教の思想』四、一
 九三―一九五頁。
 (38) 大正蔵四〇、八四一上。
 (39) 大正蔵四〇、八二八中下。
 (40) 藤堂恭俊『浄土仏教の思想』四、一四三頁。
 (41) 大正蔵四〇、八二七上。
 (42) 大正蔵二五、一〇九上、一三〇下、五五〇中。また、大須賀秀道
 「知恩報徳の義」(『宗学研究』二〇・二十一号合併、二三―二四頁、
 一九四〇年)。
 (43) 大正蔵一二、二七七下。
 (44) 大正蔵一二、二六九下、二七三上。
 (45) 大正蔵二六、一〇九下。
 (46) 大正蔵二五、三四二。
 (47) 大正蔵四七、四三九上、四四〇下、四四三下、四五四上、四五三下。
 (48) 大正蔵三七、二七三下。また、大正蔵四七、四五四上中。
 (49) 藤堂恭俊『浄土仏教の思想』四、一四九頁。
 (50) 大正蔵二五、四一一上、四二一下。
 (51) 平川彰『初期大乘仏教の研究』I、四六六頁。春秋社、一九九二年。
 (52) 宮本正尊『大乘と小乗』五七二頁。八雲書店、一九四四年。
 (53) 大正蔵二五、五八六上。
 (54) 大正蔵二五、二三三下。
 (55) 大正蔵二五、四一七下、三六二上。また、山本啓量「仏教認識論に
 おける無生法忍とその周
 辺」(『印仏研』十五の一、三七八頁、昭和四十一年)。
 (56) 大正蔵二五、五〇七下。
 (57) 大正蔵二五、六七〇上中。
 (58) 大正蔵二五、一六二下、六六八下、五六九下。
 (59) 宮林昭彦「龍樹の戒思想」(『龍樹教学の研究』二二九頁、大蔵出版
 社、一九八三年)。
 (60) 大正蔵二五、四一一下。
 (61) 同右、四八八中下。
 (62) 同右、四七四下。
 (63) 大正蔵二五、三四二下、六六二中。
 (64) 大正蔵四七、一一下。
 (65) 同右、四三二中、四三三中。また、深貝慈孝『中国浄土教と浄土宗
 学の研究』三〇一頁。
 (66) 大正蔵四七、四四八下、四四九上。
 (67) 藤本浄彦『法然浄土教の宗教思想』九一頁。平楽寺、二〇〇三年。
 (68) 大正蔵四七、二十三中。
 (69) 大正蔵四七、四三九上。
 (70) 大正蔵三七、二四六中。また、小林尚英「善導大師の観仏三昧と念
 仏三昧について」(『大正大学院論集』三、一二九頁、昭和五十四
 年)。
 (71) 大正蔵三七、二五一中。
 (72) 八力広超「善導における「往生」の形態」(『印度哲学仏教学』一一
 号、一八五頁、平成八年)。
- (おう ぎよく か 文学研究科浄土学専攻博士後期課程)
 (指導・藤本 浄彦 教授)
 二〇〇九年九月三十日受理